

農林水産大臣賞（優秀賞）

父祖の思いを受け継ぐ

鹿児島県 志布志市立有明中学校 二年 田中 恵仁

美しい自然が広がるこの地、有明。春、張り巡らされた用水路を伝って水が大地を潤していく。秋には黄金色の実りが頭を垂れる。

私の将来の夢は、おいしくて安心・安全な米を食卓に届けることで、多くの人を笑顔にする稲作農家になることだ。私の祖父母は米を作っている。私は小さなときから自然が好きだった。特に、水を使い、汗水を流して作業する祖父母の姿がかっこよくて仕方がなかったのだと思う。どんなに疲れていても、どんなに天気が悪くても二人は辛そうな顔一つせず作業をしていた。私たちに美味しいお米を食べさせようと、苦勞を見せないでいたのだろう。

小学校の時に田んぼづくりから米ができるまでの学習をした。その時、田植えでどろんこになったり、夏の暑い日に水の管理に学校に行ったり、台風で稲が倒れないか心配したり、どれくらい収穫できるか楽しみだったり田植えから四か月半程の間、一喜一憂する毎日だった。私たちが作った田んぼは、祖父の田んぼの広さよりはるかに小さいのに、これだけのいろいろな気持ちになったことを考えると、祖父はどんな思いなのだろう。

農業は自然を相手にする仕事、大変だ。特に水がなければ作物は育たない。私の住んでいる有明町の歴史はまさに水との闘いの歴史と言っていい。それは、私の通っている有明中学校の校歌にも表れている。

「父祖の拓きし 野井倉の 豊かなみのり たゆみなき 進取の気象 受け継ぎて 郷土の栄 築きゆく」

私はこの歌詞を読んで、これは郷土の先人たちが、この有明の地を開田したことについて書いた詞だと分かった。歌詞の意味をかみしめながら歌うたびに、私の心を優しく包み込むと同時に、ちっぽけな自分の存在を郷土の先人に励まされるのである。

有明の野井倉は川から五十メートルの高さに広がる台地である。用水

路が作られる前の野井倉は、畑として利用されているほかは一面にススキが生える荒地だった。畑では、陸稲、粟、ソバ、サツマイモなどが栽培されていた。水は谷底の川から運んだり、深い井戸を掘り、牛や馬を使って苦勞して汲み上げたりしていた。人々は農業ができない冬の間、荒れ地をスキヤクワで切り崩して細々と小さな田を開いていたという。その時、立ち上がったのが二十一歳の野井倉甚兵衛である。しかし、開田の苦勞は並大抵のことではない。莫大な費用の工面、難工事の技術、戦争…。途中何度となく計画は挫折しそうになる。

水は台地から約十三キロ離れた川の上流から引かねばならない。溝を掘り、三十四ものトンネルを掘る作業である。現代のような重機のない時代、人間の手作業で進めていく。ツルハシで岩に向かっている写真が今も残っている。

様々な困難の末、ようやく完成したのは、彼が七十八歳の時のことである。約六十年もの間、生涯をかけて野井倉に水を引くこと一筋に生きてきたのだ。

とうとうと流れる用水路の水と一面に広がる田んぼ。今では当たり前風景だが、以前は違う。ここの人々は、水の大切さを身を以て知っている。そしてそれを次代に伝えようとしている。

祖父母の手伝いをしている時、祖父は米作りのことや将来のことなどを語ってくれる。祖父母は年々老いていく。今は苦勞して作っている米を今度は私が作って、二人には樂をさせてやりたい。

季節がめぐってまた、用水路に水が流れ、野井倉台地は一面の水田に姿を変えた。私も、郷土の先人や祖父母たちの思いを受け継ぎ、水の豊かなこの土地で自分の人生を開拓していきたい。